銅賞　林　号太君

北海道工業大学工学部建築学科　　うつろいの家

建築は実体を伴う。風土や時間までも引き連れる。現実に建築界はどうであろうか。何か実体感のないアイデアだけの本質を忽せる作品が主流になりつつある。各界からの批判が多いのはこのためである。実体になると急に脆弱で美しくないのだ。都市をつくる強度がないと読み替えても良い。さて「うつろいの家」を見た時にそのカテゴリーかと思った。しかし読み解いているうちに非常に未来を感じたと同時に美しい形態を想像できたのだ。プレゼンテーションだけが美しいのではない。文句なく建築としてのセンスが結実している。家具や道具と建築との間にはまだまだ解決しなければならない問題はあるが、「建築」に希望の光をあてた一作であることは間違いないだろう。

（文責：中山　眞琴）